第三十七期開講記念講演（ダイジェスト版）

発菩提心ということ

東洋大学名誉教授・元学長　竹村牧男　先生

一、はじめに

皆さんこんにちは。まず三十六期の修了生の方、ご修了おめでとうございます。お疲れ様でした。そして三十七期の入塾生の方、東京国際仏教塾へのご入塾、おめでとうございます。これから、それぞれの選ぶ宗派で仏道を歩んでいこうという決意を固められたということで、深く敬意を表したいと存じます。今日は仏道を歩むという決意と言いますか、覚悟を定めると言いますか、菩提心を起こすということ、発菩提心についてお話ししようと思います。

発菩提心、詳しく言うと、発阿耨多羅三藐三菩提心、阿耨多羅三藐三菩提心を起こすということですね。阿耨多羅というのは、これより上がないという意味です。三藐というのは正しいということ。三菩提というのは完全な悟りとよく訳されます。この上ない正しい完全な悟りを求める心を起こしたというのが発阿耨多羅三藐三菩提心、少し縮めて発菩提心、もっと縮めると発心ですね。大乗仏教では、我々の心が修行によって悟りの智慧に変わるとされますが、その悟りの智慧が阿耨多羅三藐三菩提ということになります。

二、仏とは何か

（一）大乗仏教の目標

仏教の考え方として、我々が苦しんでいるのは、自我に執着しているからだとされます。変わらない自分というものがあると思ってそれに執着して、他人と比較しながら自分を守ろうとする。そういう自我に対する執着、これを我執と言います。

それから仏教ではそういう自分も含めて、世界を構成している要素となるものを分析しております。大乗仏教の前の説一切有部という部派、その教理は倶舎論にまとめられていると言われていますが、そこでは五位七十五法という七十五のダルマ（法）というものが分析されました。このダルマとは、世界の構成要素に当たります。それには物質的なもの、心理的なもの、さらには物でも心でもないもの等、いろいろと分析されています。その諸法に対する執着が法執というものです。ですから法執とは、単に外界の物質的なものに対する執着だけではないのですが、あえて分かりやすく言えば、いろいろなものに対する執着というふうに考えてよろしいかと思います。

それで大乗仏教は、人間にはそういう我執と法執とがある、これを超えていかなければなかなか苦しみからは解放されない、という基本的な認識を持っているわけです。この中、我執を修行によって断つと、涅槃が実現すると言われています。逆に自我に執着するから、また次の世に生まれてくる、生死輪廻するということもあるわけです。我執を断つことによって、生死から解脱し涅槃に入るということになります。小乗仏教ではそれで満足する、生死輪廻の苦しみから解放されて満足ということになります。

しかし大乗仏教はそういう涅槃に入ったとして、それが本当に我々のいのちの目標なのであろうか、ということで、人間には法執もありますね、これも解決しなければなりませんねと、法執を断つことによって悟りの智慧を実現する、菩提を実現することも目指さなければならないと考えました。こうして、大乗仏教では我執と法執をともに断っていく。そのために、一切法空という思想も説かれたのです。我執と法執をともに断っていくことによって、涅槃と菩提の双方を実現する。この菩提が実現した時は、生死のただ中に空なる世界、寂静なる世界、涅槃を見ることになります。すなわち、生死の中へ入っていって、人々を救済する活動をし続けるただ中に、涅槃を見るということになります。これを無住処涅槃というのです。生死には住しないが涅槃にも住しないという無住処涅槃を実現します。これが大乗仏教の目標であり、この両方を実現した人が仏と言われる存在です。

小乗仏教の場合はお釈迦様が一人、仏なのですが、大乗仏教ではみんながそれぞれ仏になっていくのです。過去に修行を果たして仏になった人もいるし、今まさに仏になる人もいるし、未来に仏になる人もいる。三世ですね。それから十方。東西南北、およびそれぞれの間にある南東・南西・

北西・北東、これを四維と言います。それに上下を合わせて十方。三世十方に多くの仏さまがいらっしゃるという、これが大乗仏教の仏への見方なのです。

浄土教もまたその自己が仏になっていく道なのです。阿弥陀様の本願によって救われて、自分自身が仏になっていくのです。そして仏になったらまたこの娑婆世界へ戻ってきて、人々を救済する活動をすることになるのです。このように浄土教でも仏になることが目標であるということの一つの例証として、親鸞さんが夢のお告げを受けて大変喜んだと言われている『正像末和讃』の和讃を紹介しましょう。

弥陀の本願信ずべし、本願信ずる人はみな、
摂取不捨の利益にて、無上覚をばさとるなり

無上覚というのは無上正等覚、阿耨多羅三藐三菩提のことです。ですから、浄土教もやはりその悟りを開いて人々の救済に関わっていくということが究極の目標になっているわけです。

（二）菩提

先ほど菩提というのは悟りの智慧だということを言いましたが、唯識で説明すると、私どもは八識から成り立っていると説明されています。眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、これは五感ですね。視覚、聴覚、嗅覚等々。これを前五識と言います。それから第六の意識。ここまでは我々も自覚しているわけです。

そして意識の奥に第七末那識という、常に自我を執着している、そういう心があると言います。さらにその奥に、第八阿頼耶識があると言います。阿頼耶とは、サンスクリット語のアーラヤという語の音写です。アーラヤは蔵の意味。要するに過去一切の経験を貯蔵している心の世界ということです。仏教の場合は生死輪廻を考えておりますから、始めのない過去から生死輪廻してきた、その経験の一切を貯蔵している世界があるということを、唯識では説くわけです。

こうして八識によって我々を説明するわけですが、修行が完成すると阿頼耶識が大円鏡智、大きな丸い鏡のような智慧に転じる。末那識が智慧に転ずると平等性智。これは一切法の平等性と自他平等性とを悟る。自他の本質・本性は全く一つであることを悟る智慧になります。この智慧が他者救済の原動力になるのです。自他が一つであるということの自覚が生まれますので、他者が苦しんでいると自分も苦しい、なんとかしなければということになっていくわけです。

第六意識が智慧に変わりますと妙観察智。正しく現象の一つ一つを分析する智慧に変わります。そして、五感の識は成所作智という智慧に変わるのです。所作とはなすべきところという意味です。なすべきところとは何かというと、修行に入っていくその最初に、自分の修行が完成した時にはどういうことが実現しますようにと願を立てる、その願に誓ったことがなすべきところです。修行の本初に立てる願を本願というのですが、その本願に誓ったこと、だいたいは一切衆生の救済、それを成就していく智慧、それが成所作智ということになります。

（三）涅槃

以上が菩提の内容の簡単な説明ですが、涅槃も『成唯識論』では四つに見られていまして、まず自性涅槃、本來自性清浄涅槃。我々はどんなものに執着したり、自我に執着したりしていても、その本質は空である。その空性の中に生きているわけですね。ですから、もともと涅槃の中にいるのです。そのことを意味するのが自性清浄涅槃です。

とはいえ、凡夫はそのことには気づかないわけです。自我に執着したり、ものに執着したりして、本当は涅槃の中にあるということがわからない。そこで修行していって、我執のみを断って修行が完成したとします。修行が完成して我執を断ち尽くしたけれども、過去世の業によって生まれたその身体、あるいは心の働きは残っている、その段階を有余依涅槃といいます。

そしてその人が死ぬと完全な涅槃に入る。般涅槃（はつねはん）するということで、無余依涅槃ということになります。この二つは、声聞・縁覚の涅槃です。

大乗の場合は無住処涅槃です。先ほど言ったような、我執も法執も断ったところで、智慧として働いていく。その智慧は自ずから大悲として働いていくのですね。そして衆生救済の活動をしていく。そのただ中に見られる真如。それはまた法性、空性です。空であるというあり方、シューニャター（法性）ですね。これを言い換えて真如、タタターというのです。シューニャターもダルマターもタタターも同じものを言う言葉です。智慧を発揮して働いている、そのただ中に空性の世界、言い換えれば真如の世界があるわけです。我執と法執を脱した真如がそこにあるわけでありまして、それに対して無住処涅槃という名前で呼ぶということになっております。

そうした涅槃を実現していくというのが、大乗仏教の道になるわけのです。

三、仏道修行の道程

（一）大乗仏教の修行プロセス

大乗仏教はその修行の全体をどのように説いているかと言いますと、それにはいくつかあるのですが、一つは「教・信・行・証」です。経典等を学んで、あるいは説法を聞いて。そして信が確立して、その信のもとに修行をしていく。そして悟りを得る、そういう「教・信・行・証」というプロセスというのが一つあるわけです。親鸞さんは『教行信証』という書物を書かれました。その場合の行とは諸仏の行のことなのです。諸仏が阿弥陀様をたたえる。阿弥陀様は我々が頼るに十分な救い主ですよということを、諸仏が我々に聞かせてくれる。そこで信が生まれる。信が生まれると直ちに救い、安心に至る、これが親鸞さんの「教行信証」なのです。ただ、オーソドックスには「教・信・行・証」という道筋があるのです。

あるいは「聞・思・修」。やっぱり教えを聞くというのが最初なのです。教えを聞くことによって信が生まれる。信が生まれると修行していくということになります。あるいは「発心・修行・菩提・涅槃」ともよく言います。道元さんの『正法眼蔵』にはこの言葉がよく出てきます。まず、菩提心を起こして、修行をして、そして仏果を得る。仏果というのは仏になるという結果です。その仏果の内容が菩提と涅槃です。

（二）密教における仏道修行

なお密教では、たとえば『大日経』に、「菩提心・大悲・方便」という仏道の全体像を示す言葉があります。

「菩提心を因となし、悲を根本となし、方便を究竟となす。秘密主、云何んが菩提とならば、謂く、実のごとく自心を知るなり」

悟りとは何かというと自分の心を完全に知ることと言うわけですね。その菩提を実現する道として、「菩提心を因」とする。菩提心を起こすということでしょう。次の「悲」というのは、衆生を救済しようという願のもとにさまざまな修行を行う、「大悲万行」のことを意味するのです。そして「方便」。この方便の語は修行のことも意味しますが、利他の活動、他者に対する活動において、相手にふさわしいさまざまな救済の手立てを講じる、その方便という意味もあります。実にそれが仏道の究極であるという言葉が、『大日経』にあるのです。

また、『吽字義釈』という空海さんの一つの著書があります。その中に、「此の一字を以て、三乗の人の因行果等を摂するに悉く摂して余無し」とあります。「此の一字」、すなわち吽字の中には、「因・行・果」として、菩提心・大悲・方便の三句の法門が込められているというのです。三乗というのは声聞乗、縁覚乗、菩薩乗のこと。それから顕教の一乗。空海さんの思想体系の中では天台と華厳は一乗だという見方があります。一方、秘密一乗が密教ということなのですが、要はあらゆる大乗仏教、あらゆる経論が説くところは、この三句の法門に収まるということが言われております。

（三）阿字の五転

それから密教では、アという字、字とは基本的に母音・子音を意味するのですが、そのアという母音が、一切の母音・子音の根源だと言っています、その阿字の中に、仏道の全体が含まれていることを示して、阿字の五転というようなことを言うのですね。

毘盧遮那経の疏に准ぜば、阿字を釈するに、具に五義有り。一には阿字（短声）是れ菩提心なり、二には阿字（引声）是れ菩提行なり、三には暗字（短声）是れ証菩提の義なり、四には悪字（短声）是れ般涅槃の義なり、五には悪字（引声）是れ具足方便智の義なり。（『定本』第三巻、一七一頁）

「毘盧遮那経の疏に准ぜば、」「毘盧遮那経」というのは『大日経』のことです。その疏というのは注釈書。善無畏が『大日経』を翻訳してその内容を解説した。それを一行という人が筆写した、そういう注釈書、『大日経疏』があるわけです。

「阿字を釈するに具に五義有り（阿という文字に五つの意味合いがある）。一には阿字是れ菩提心なり、二には阿字是れ菩提行なり」。アという場合、サンスクリットはアという短母音とアーという長母音があります。アー（引声）といった時には菩提行だというわけですね。

「三には暗字、是れ証菩提の義なり」。これはaにm。mの下に点があるのですけど、鼻音をつけてアンとした場合、菩提を証するの意。ですから悟りに至ったということですね。

「四には悪字、是れ般涅槃の義なり」。悪は、aにh。hの下に点をつけた文字があるのですね。アハです。これは涅槃を意味する。

「五には悪字、是れ具足方便智の義なり」。この悪は引声と書いてありますから、アーハです。aの長母音にhの下に点をつけたもので、アーハ。方便の智慧を具足すると言っています。この方便は、衆生を救済する適切な手立てのことでしょう。

ですから、密教の場合は、発心・修行・菩提・涅槃にとどまらない、その後に方便が出てくるわ

けです。密教の仏道では、「発心・修行・菩提・涅槃・方便」で全体だという認識が示されているのです。

それから『法華経』では、なぜお釈迦様がこの世に現れたのか。これを一大事因縁と言います。本当は久遠実成の釈迦牟尼仏、もう久遠の昔に実に悟った仏がいらっしゃる。その仏は、成道以来、一時も休まず衆生救済のために働いている。その久遠実成の釈迦牟尼仏が化身となって姿・形を現したのが歴史上の釈尊だと言われています。では、なぜ釈尊がこの世に姿・形をとって現れたのか。その理由、その一大事因縁は「開・示・悟・入」だと明かされています。人々に仏知見を開き、人々にそれを示し、人々にそれを悟らしめ、人々にその仏知見に入らしめる、と。そのために釈尊はこの世に現れたのだ。ただ、密教の場合はその「開・示・悟・入」の四つで収まらなくて、常に五つで語っていくわけですが、その五つ目については、「総じて之を言わば、具足成就の第五の悪字なり。これ方便善巧智円満の義なり」とあります。「開・示・悟・入」の後に、それぞれの衆生にふさわしいように導いていく。その手立てを発揮してやまないということが意味されているということを言っているわけです。ですから、密教の仏道の全体は、根本に菩提心、そして大悲万行、そして方便。あるいは発心、修行、菩提、涅槃、方便とまとめられるということになるかと思います。このように、密教はこの方便ということ、他者をいかに救済していくか。忍耐強く導いていくか、が常に強調されていることには、留意してよろしいのではないかと思います。でも、これは密教だけではなく、大乗仏教の理想とするところですね。

四、仏教の信『成唯識論』から

そういうわけで、仏道というのは、やっぱり経典を聞くこと、経典を聞くということは、仏様の説法を聞くということ、この仏様の説法に出会うことから始まるわけです。教えを聞くことによって信が確立されてくる。そうすると、この仏道を歩んでいくということになるわけです。では、その信というものはどういうものであるのか。おそらく、いろいろな信が、それぞれの宗教、もしくは哲学等で説かれていると思いますが、では仏教では信ということをどうのように考えているのかと言いますと、『成唯識論』に次の説明があります。

「云何なるか信と為る。実と徳と能との於に、深く忍じ楽じ欲して」この実とは何か、徳とは何か、能とは何かについては、その後に説明があります。楽ずとは願うということです。実を認じ、徳を願い、能に対して欲する。

「心を浄ならしむるをもって性と為す」信を持つと、心が清まってくると、そういう性格のものだというのです。

「不信を対治し、善を楽うをもって業となす」信の働きとして不信を対治して善を楽う、この善は仏道修行のことでしょう。業とは働きのことです。信の心には、仏道に親しんでいく、そういう働きがあるということです。

「然も信の差別なること、略して、三種あり。一つには実有を信ずる」先ほどの実というのは実有のことだと言っています。この実有とは何かというと、「謂く、諸法の実の事と理と」とあります。

我々は何か、リンゴならリンゴというものを実体視して存在すると思う。だけど、本当にあるのは諸法の現象だけなのです。その現象は五位百法のようなダルマから成り立っています。それらが事ということになります。一方、理とはその現象全体を貫く本性、先ほども言いました、シューニャター、それはダルマター、それはタタター、以上はみな同じものですが、そういう究極的な普遍的なる存在としての真理ですね、また、諸行無常、諸法無我というような道理も理と見ることができます。そういう、仏教が明かす実の事と理に対して「深く信忍する」深く認識するということでよろしいでしょう。

それから徳というのは有徳、徳のあるもののこと。それは何というと、「三宝の真浄の徳の中に於て、深く信楽するがゆえに」とありますので、仏法僧という三宝、三つの宝のことになります。この中の僧とは、サンガのことですから、修行者の共同体、あるいは仏教信徒の共同体でもよろしいでしょう。お坊さん一人という意味ではありません。その三宝に功徳があると理解して、それらに対して「深く信楽する」。いわば三宝に憧れを持つというような意味合いになるかと思います。

「三つには有能を信ずる(能力があるということを信じる)」。どういう能力かと言いますと、「謂く、一切の世と出世との善の於に、深く力ありて能く得し能く成ぜんと信じて、希望を起こすが故に」。これはどういうことかと言いますと、仏教が説く修行、その代表的なものには六波羅蜜がありますね。布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧。でも、それだけではないのですね。「一切の世と出世」世間というのは、まだ悟りを開いてない段階。出世というのは悟りを開いた後の段階のことです。いったん悟りを開いても、それですべてが片付くわけではない。さらに修行していって、完全な悟りに到達する。発菩提心して、十住・十行・十廻

向・十地と進む修行の階梯の中、十地の最初の段階で、無分別智が開け、無分別智が開けると後得智も実現して、それをもとにさらに修行していって仏になっていく。ですから、そういう悟りを開く前の段階と、悟りを開いた後の段階での修行、それが世間と出世間の善ということになります。その仏教が説く修行というものは非常に力があって、仏果をよく実現し、よく成就するとそう信じて、そしてそれを実践していきたいという心を起こすのです。

教えに対しては、深い知的な了解が必要です。三宝に対しては、いわば情的な、親近感や尊敬の心もあるでしょう。それで、修行に対しては意志、意欲ですね。ですから、知性と感情と意志が最終的には渾然一体となったものが仏教の信であるということになるわけです。

「斯(こ)れによって彼を信ぜざりぬ心を対治して、世・出世の善を証し修せんと愛楽す」。彼とは仏教です。信の心は、仏教を信じない心を対治して、仏道の修行に親しんでいくのだということです。

「忍というは、謂く勝解（はっきりそうだと了解する）なり。此れ即ち信が因なり。楽欲というは謂く、欲ぞ。即ち是れ信が果なり」。最初に知的理解があって、それで三宝への親近と修行に対する意欲が結果として生れると言っています。なお、この後では、信というのはそれ自身が清らかな心で、しかも心全体を清らかにしているという際立った働きがあるのだということを言っております。

経典をいろいろ学んでいく、あるいはいろいろなお坊さんに教えを聞いていくことによって、信が確立されていく。そうしますと、菩提心を起こして仏道に入っていくということになるわけです。仏教の修行の階梯として中国、日本では五十二位という階梯が一般的です。十信・十住・十行・十回向・十地・等覚・妙覚、こういう五十二の段階がある。十信の修行が完成すると、十住の最初に入ります。その十住の最初が初発心住という段階です。十地の最初に登る時に、無分別智、悟りの智慧が開かれ、後得智も開けます。しかし、それですべてが解決するわけではなくて。さらに十地の段階の修行をしていくわけです。

五、発菩提心の諸相

そういうわけで、信が確立されますと、菩提心を起こすということになるのです。では、菩提心を起こすことはどういう状況によってなのかというと、『発菩提心経論』という書物がありまして、そこでは四つに整理しています。

「一つは諸仏を思惟して菩提心を起こす」。諸仏の優しさとか素晴らしさとかに触れて、感激して、というようなことでしょうか。

「自身の過患を観じて菩提心を発す」。もう自分はどうしようもない、仏道で救われるしかないと思って、自分の悩みの解決のために仏道に入ってくる。そういう場合もあるでしょう。

「衆生を悲愍して菩提心を発す」。人々が苦しんでいる。それをどうやって救うかということが自分の課題になってきて仏道に入っていく、というしかたで菩提心を起こす方もいるでしょう。

「最勝の果を求めて菩提心を発す」。人生において一番価値のあるもの、優れたものは何か。それは菩提と涅槃を実現することだと、そう思ってこの道に入ってくる、

発菩提心に関しまして、このような整理の仕方もあるようです。

六、本願とは何か

前にもちょっとふれましたが、信が確立して菩提心を起こすときに、これから仏道を歩んでやがて仏になったときにどういうことを実現しようかと、そのことをよく考えて誓願を立てるということがありまして、それを本願というのでした。本願はあらゆる菩薩に共通の願と、別願と言ってその人独自のこういうことを実現したいという願と、二種類あるのです。

共通の願としては、いわゆる四弘誓願があります。宗派によって若干違うかもしれませんが、普通は、「衆生無辺誓願度　煩悩無尽誓願断　法門無量誓願学　仏道無上誓願成」というものです。これはどんな人でも大乗仏教の道を歩もうとしたら共通に立てる願であるのです。この願では、「仏道無上誓願成」が一番の目的かと思われるかもしれませんが、まず最初に「衆生無辺誓願度」から始まるわけですね。そしていろいろな願が出てくる。一番の眼目は、「衆生無辺誓願度」にある、というのが四弘誓願の心なのです。

七、『菩提心論』の行願心

密教の一つの論書に、龍猛作と言われている『菩提心論』があります。まさに菩提心を論じた書物です。それは「行願心、勝義心、三摩地」によって菩提心ということを説明するのですが、その最初の行願心。三句の法門でいうと、まさに菩提心ですね、これについて『菩提心論』は次のように言っております。

「初に行願とは、為(いわ)く修習の人、常に是の如くの心を懐(ふところ)べし。我れ、まさに無余の有情界を利益し

安楽す（残りなくすべての有情を利益し、安楽にさせる）。十方の含識を見ること」含識というのは有情と一緒です。心あるもの。

「猶し己身の如し」。他者を自分のように思って、その他者を救済、あるいは利益し、安楽させていこうという心を抱くべきだというのです。

「言うところの利益とは為（いわ）く、一切有情を勧発して、悉く無上菩提に安住せしむ」。みんな仏道に導いて悟りを開かせ、仏にならしめる、そのことが利益だと言うのです。

「言う所の安楽とは、謂く、行人、既に一切衆生、畢竟成仏すと知るが故に、どんな人も必ずや成仏すると知るがゆえに、敢えて軽慢せず（軽んじず侮らず）、また大悲門の中に於て、尤も宜しく拯救すべし」。拯救とは助けて救うという意味です。救うのは仏道に導くと言いますか、それが救いになるのでしょう。

「仏道の究極は方便（衆生教化）にある」と説かれる竹村先生

簡単にまとめますと、「利益する」とは、無上菩提を実現させることであり、「安楽にする」とは他者を尊重して自己の身命を惜しまず、他者を安存せしめ、悦楽せしめることだと書かれております。悦楽の内容も、宗教的な意味での楽を与えていくということでしょう。その際、自ら師となって他者を導いていくということが言われているのです。

それから空海さんに『三昧耶戒序』という書物があります。三昧耶戒とは密教が授ける戒のことです。その意義について明かしたものですが、そこに「大悲心、勝義心、大菩提心」ということが出てきます。これは『菩提心論』の「行願心、勝義心、三摩地」と順に対応しているものですが、この大悲心について、空海さんは次のように言っています。

「大悲心とはまたは行願心と名付く。言く、外道・二乗は此の心を起こさず」。大悲心は、『菩提心論』の行願心であると言い、この、他者に関わっていくとか、他者の苦しみを除くとかいう心を、声聞・縁覚は起こさない。

「菩薩大士のみ有（ま）して」菩薩というのは大乗仏教の道を歩む人。観音や弥勒とか文殊や普賢とかの高位の方だけではなくて、菩提心を起こしたらその人はみんな菩薩なのです。その菩薩が、

「能く此の心を発して、法界無縁の一切衆生を観ずること、猶し己身の如し」。一切衆生を自分だと観ずるのだと言うのです。どうしてか。

「然る所以は、善人の用心は他を先とし己を後とす」。声門・縁覚は自分さえ救われればいいという立場。だけど大乗の道の人は、他を先として自分を後回しにする、そういう尊い心を持った方なのだ。

「又た三世（過去、未来、現在）を達観するに、皆な是れ我が四恩になり。」四恩というのは、「父母の恩、衆生の恩、国王の恩、三宝の恩」これが四恩です。衆生というのは人間だけではありません。あらゆる地獄・餓鬼・畜生、修羅、人間、天上、すべてを含んでいるのです。昔は国王が社会の福祉を担っていた。今は国家とか社会というようなことになるかもしれません。そして仏法僧の三宝。そのそれぞれの恩をいただいているという思想が四恩の思想です。すべては私に恩恵を与えてくださった方々ばかりだと。

「四恩は皆な三悪趣に堕ちて無量の苦を受く」。今、地獄とか畜生とかで苦しんでいる人も自分の関係者だというわけです。かつては自分におかげをくださった方だと。

「吾は是れ彼が子なり。復た彼が資なり」。自分は、そういう無量の苦を受けているものの子供である。また、資とは弟子という意味です。自分は彼に導かれたものだ、一切衆生は、私が無始以来、生死輪廻してくる中で、関わってきた方々だという認識があるわけです。自分がお世話になった方ばかりだというのです。

「我に非ずんば、誰か能く抜済せんと（そういう苦しんでいる人を、自分でなければ、どうやって救うことができようか）。是の故に此の大慈大悲の心を発す。大慈は能く楽を与う。大悲はよく苦を抜く。抜苦与楽の本は、源を絶たんには如（し）かず（苦しみの源を絶たなければならない）。源を絶つの立つ首（はじめ）は法を授かるには若（し）かず」。要するに、仏教の教えを聞くことが、苦しみを絶っていく一番の根本だというわけです。

「法楽万差なりと雖も（教えにはいろいろあるけれども）、前の所説の八種の法門、是れ彼の本な

り。」この八種の法門とは、いわゆる「十住心」という、凡夫から始まって第二住心が儒教、第三住心がバラモン教で、声聞・縁覚、そして法相宗、三論宗、天台宗、華厳宗、その上に密教があるという見方があります。その密教の前の、二番目の儒教から九番目の華厳まで、それが八種の法門です。要は人間がいかに生きるかということに関する教えという意味です。八種の法門と書いてありますが、もちろん空海さんとしては、やはり大乗仏教ないしは密教によって初めて苦しみというものも解決していくでしょう、ということを考えておられると思います。そういう教えを授けることが、人々の救済の根本となるのだと言うわけです。

八、「自未得度先度他」の思想

今、見た中に、本当に素晴らしい人間は、自分は後回しにして他者のことを第一に考えていくものだ、ということが書かれていましたが、一方、『菩提心論』にはそのことを説く『涅槃経』の次の句の引用があります。

世間を憐愍したまう大医王、身及び智慧、倶に寂静なり、
無我の法の中に、真我有り、是の故に無上尊に敬礼す、
発心畢竟、二つ別なること無し、是の如くの二心は、先心難しとす、
自ら度を得ずして先ず他を度す、是の故に我れ初発心を礼す、
初発、已に人天の師と為って、声聞・縁覚に勝出せり、
是の如く発心は三界を過えたり、
是の故に最無上と名づくることを得。

「発心畢竟」、発心は初めて菩提心を起こした修行の最初、その修行の終りに仏果を得たところが畢竟でしょう。初発心と仏果は異ならないというのです。もう菩提心を起こしたら、そこに仏の世界がある。しかし、その菩提心を起こすというものはなかなか難しい。というのも、その菩提心を起こすとは何かというと、自分は救われなくても、まず他者を救っていくという心を起こすことなのだとあります。

このことは、非常に難しいですよね。しかしその心を起こした人は非常に尊いわけですから、「我れ初発心を礼す」ということにもなりますし、実際、そういう心を起こした人はもう声聞・縁覚をはるかに越えている。このようなことが『涅槃経』に書かれていて、これが『菩提心論』にも引用されているのです。

このことは道元禅師も言われています。

「おおよそ菩提心とは、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、仏道に引導せましと、ひまなく三業にいとなむなり」。三業とは、身業、語業、意業、身体の行為、言葉の行為、心の行為です。

「いたづらに世間の欲楽をあたふるを、利益衆生とするにはあらず（衆生を利益することとはしない）。この発心、この修証、はるかに迷悟の辺表を超越せり（悟りや迷いなんていうことをはるかに超えている）。三界に勝出し、一切に抜群せる、なほ声聞・辟支仏のおよぶところにあらず」。

さきほど、その初発心と仏の世界が全然変わらないのだという話がありましたが、このことは『華厳経』にしばしば説かれているところです。その代表的な句は「初発心の時に、すなわち正覚を成ず」（初発心時、便成正覚）です。

その他にも『華厳経』の中には、初めて菩提心を起こしたものは、もう仏と同じだと。そういうことが、たくさん説かれております。

しかし、その菩提心の内容というのはそれぞれ違うと思います。自分のこの苦しみをなんとかしたい。それは当然だと思うのですね。と同時に仏の教えを聞いていく中でやはり自分よりも他者をという心が起きてくるとすれば、それは本当の菩提心であると言えるのではないかと思います。

九、浄土教における発菩提心の問題

浄土教はそういう菩提心も起こせないものが、いかに救われるかという、そういう世界なのですね。特に親鸞さんの真宗は、絶対他力ということも言うわけです。親鸞さんの浄土教の世界ですが、十回でも念仏したら往生できるというのが阿弥陀仏の本願の第十八願で、その前に第十七願があって、その願は、阿弥陀仏が修行が完成した時に、自分のことを諸仏が称えてくれるように、それを衆生に聞かせてくれるように、というものです。その第十七願と第十八願を合わせたような句が『無量寿経』の巻下の冒頭に書かれています。

「十方恒沙のもろもろの仏・如来、みなともに無量寿仏の、威神功徳の不可思議なることを讃歎したもう。」先ほど「教行信証」の行というのは諸仏の行だと言いましたが、このことなのですね。

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜し、ないし一念せん」。こちらは十念じゃなくて一念になっています。

「至心に廻向して、かの国に生れんと願わば、すなわち往生することをえて、不退転に住すればな

り。」不退転に住したら必ず仏になるということが約束されたということですから、そこでもう仏に成ったも同じだということになるわけです。親鸞さんは、この「至心に廻向して」という句を、「至心に廻向したまえり」と読まれるのですね。阿弥陀様の側から我々にその救いを届けようと、「廻向したまえり」と読まれるのです。それによって救われると。ここを『教行信証』では次のように説明しています。

「しかるに『経』に「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。これを聞といふなり。」いかに阿弥陀様が、本願を立てて、いかに衆生救済しようと努力されたかを了解するのが、聞くということだと言っています。

「「信心」といふは、すなわち本願力廻向の信心なり。」その信心とは、阿弥陀様の本願力によってこちらに向けられた信心である。

「「一念」といふは、信心二心なきがゆゑに一念といふ。」法然門下のお弟子さんたちの間で多念義とか一念義とか、いろいろな考え方があったと言うのですが、この一念は親鸞さんにしてみれば、一念という信心に二心がない、それが一念だと。一回の念仏っていう意味でもないと言うのです。阿弥陀様がこちらに差し向けてくださったその心、それに二心はない。一心にこの私を救おうとされている。それがこの一念という言葉で表されていると読まれるのです。

「これを一心と名付く。一心はすなわち清浄報土の真因なり。金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え」

この如来が私を救おうとしてくださっているということを自覚した時、もう横っ飛びにですね、だんだん十信十住十行と修行していくのではなくて、直ちに五趣八難の道を越えてしまう、とあります。五趣とは、地獄・餓鬼・修羅・人間・天上。阿修羅を除くのです。またさまざまな困難の道を越え、「かならず現生に十種の益を獲」。

阿弥陀様の一心に出会い、救われる。ですから、真宗ではその信ずる心も、自分が信ずるというよりも、如来より賜りたる信心というのです。

浄土教で言えば、今まで私が述べてきたようなその発菩提心というのは、如来からいただく心として実現してくると、そういうふうに言えるのではないかと思うのです。

十、方便を究竟とす、と、浄土教

そもそも浄土に往生するということは、楽を受けるためではありえません。曇鸞という人は『浄土論註』、世親の『浄土論』の注釈書に、次のように記しております。

「若し人、無上菩提心を発せずして、但だ彼の国土の楽を受くること間なきを聞きて、楽のための故に生ぜんと願ぜば、亦たまさに往生を得ざるべし」。浄土は苦しみのない、心地よい世界だと。そう聞いて、その楽のために往生したいと思ったら、往生できませんよと言うのですね。

「あるいは王舎城所説の『無量寿経』(下)を案ずるに三輩の生の中に、行に優劣ありと雖も、皆な無上菩提の心を発さざることなし。此の無上菩提心とは、即ち是れ願作仏心なり。願作仏心（仏になりたいという心）とは、即ちこれ度衆生心（衆生を救いたいという心）なり。度衆生心というのはすなわち衆生を摂取して有仏の国土に生ぜしむる心なり。是の故に彼の安楽浄土に生ぜんと願ずる者は、要ず無上菩提心を発すべし」。こう言われているわけですね。

『歎異抄』には、例えば次のようなことが言われております。

「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲というは、もの（人々）を憐れみ、悲しみ育むなり。しかれども、思うがごとく助けとぐること極めてありがたし（あまりない）。浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもっておもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、すえとほりたる大慈悲心にて候ふべき」。

ということで、浄土に行ってこそ初めて人々を救済できる。だから急ぎ浄土に行くのだということが書かれているわけです。つまり浄土に行くのも結局は利他教化のため。それで往相と還相ということが言われるわけです。往相の往は娑婆から浄土に行くという意味です。還相とは、浄土から娑婆へ帰ってくることです。そして人々を救済する。それが浄土教の一番の目標になっているわけです。

そういうわけですから、浄土教においても利他教化を究極としている。方便を究極としているということに変わりはない、と思うのです。

最後に

皆さんこれからいろいろな宗派の勉強と修行に進んで行かれると思いますが、各宗等しく、究極の目標は、密教でいう方便ですね。発心・修行・菩提・涅槃・方便の方便、そこにあるということを忘れないでいただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。

（終）